

「一流になりなさい。それには、一流だと思い込むことだ」という本からです

そうか、障がいをもって生まれたか。よかったな。たくさん教えてもらえよ。

船井幸雄先生の言葉をより深く理解し、人生の確固たる道標とできたのは、長男が生まれてからだと思います。人生を強く生きる。夢を抱き、叶えるためにいかに生きるのか？そのつど、船井先生の言葉、それまでの教えに立ち返る自分がいました。長男が、先天性発達遅滞という難しい障がいをもって生まれてきたことを船井先生に伝えたとき、その第一声は、本当に私を奮い立たせてくれたのです。「そうか、障がいをもって生まれたか。よかったな」落ち込んでいた私は、その言葉で視界が開けたのです。船井先生を師として、本当によかったと心から思えました。「君にたくさん学ばせようと、障がいをもって生まれてくれたんだよ。たくさん教えてもらえよ」すべてのことは、必然・必要・ベストのことなのです。そう 15 年教わり続けていました。しかし人間は弱いものです。本当に理解するには、ぎりぎりの状態で我身に体感しなければいけないのかもしれない。いま、この子のことを、必然だととらえる。自分たちに必要なことなのだと、心底思えてはじめて視線が「未来に、これから」に向くのです。それが身体全体で 1 個の人格としてようやく理解できた、と思えました。悲しもうが、愚痴ろうが私は父親です。そのことから離れることも、逃げることもできません。何より、その日ようやく病院に向かい始めて会う我が子に申し訳ないと、心底思いました。そのとき、長男が生まれて三日目。はじめて涙が湧いてきました。「たくさん学んで、そのことを多くの人たちに伝えなさい。それが使命かもしれない。これからいろいろあるだろうけど、君たちが成長する砥石だと思うんだよ」すべては、必然・必要・ベストである。そう思うこと。すべての出来事は、自分に何かを教えるために起こること。世の中に、不必要なことなど一つもないこと。前年に移していた仙台の自宅へと向かう新幹線の中で、さまざまなことを反芻していました。「何より大切なことは、自分が父親になったことだ。そしてこの子と、夢をいっぱいもって生きるということだ。未来と一緒に生きていくことだ」保育器越しに見る我が子の、なかなか不敵な面構えに、そう思える自分がいました。さまざまな検査。日毎に、いろいろな課題、難題が示されます。退院までの数日、日に一つ二つと増えていくのです。正直に言えば、なんで我が子に！！と悲しいときがありました。また、そんな難題がこの子に……。と立ちすくむ瞬間もありました。「なあに！足が悪ければ骨を削ればいいよ。心臓が心配なら血管を移植すればいいさ。発達遅滞？そのうちに治せる時代になるよ。世の中はね、すごいスピードで進化してるよ」12 歳の頃から、人生をいかに生きるかという一点を傍で教えてくれた、医療法人徳重会みどり台小児科外科内科院長、山口正人先生の言葉に我に返ることもありました。山口先生は外科手術の大家として知られ、2000 年には、外科手術に画期的業績をあげ、医師会からの表彰も受けられました。「どうするか？それだけ考えればいいんだよ。心配なことを、洗いざらい出してしまう。心配はね、そこから考えればいい」山口先生はその後、2004 年に突然、クモ膜下出血で倒れ、生死の境をさまよいます。そしてそこから、驚異的な努力で医療の第一線に復帰し、いまでも医療法人徳重会みどり台小児科外科内科院長としてご活躍です。ご自分の言葉を、自ら苦境の中で実践して人のために尽くす。尊敬する師の一人なのです。退院して数日後、由樹と名づけた我が子の写真を持って、会長室に船井先生を訪ねました。「いい顔だな。この子は世の中に役立つ人間になるぞ」本当にそうでしょうか？少し低い声で言ってみました。「間違いないよ。だってもう君に、いろいろ教えてくれてるだろう。それだって世の中の役に立つ、ということだ」どんな親子でも、共有しているのは未来なのです。いまというこの一点から、未来を見て生きていくものだ、と教えられます。“未来創造業であれ”。これは、私が経営者によくお伝えする“経営者の一番の仕事”です。そして思うのです。親は、子供に対して、恋する未来を、その子が恋のできるような未来を語り、ともに歩むのが、一番の責任ではないかと。

船井幸雄先生の言葉をより深く理解し、人生の確固たる道標とできたのはいつと言っていますか？

()